

基礎疾患を有する母体から出生した児の問題点

(分担研究：ハイリスク新生児の管理に関する研究)

研究協力者：鬼頭 秀行

協同研究者：岩瀬 一弘

要約：平成5年から7年までの3年間に聖隷浜松病院産科で扱った5092例の分娩を対象として、産科合併症を除く基礎疾患を有する母体から出生した胎児・新生児の状況を検討した。基礎疾患合併母体の分娩は104例あり、総分娩数の2.1%を占めた。母体基礎疾患の内訳は内分泌28例、感染症24例、心14例、神経・筋13例、自己免疫8例、アレルギー8例、腎4例、血液4例、消化器3例であった。胎児死亡は在胎21週の胎児水腫1例のみであった。新生児入院は13例あり、母体基礎疾患に直接起因するものは7例で、無関係な疾患2例、母体適応による早産は4例だった。死亡はポッター症候群と筋緊張性ジストロフィの2例であった。生存102例の予後は母体と同様の疾患を有する児を除けば良好であった。適切な周産期管理を行えば、基礎疾患を有する母体より出生した児の予後は良好であると思われた。

見出し語：母体基礎疾患、合併症妊娠、新生児管理、短期予後

緒言：周産期医療成績の真の向上のためには、基礎疾患を有する母体から出生する児や、産科合併症を有する母体から出生する児の救命のみならず、その生存の質を高めることが重要である。今回基礎疾患を有する母体から出生した児の、胎児期から新生児・乳児期にいたる児の問題点を調査し、今後の周産期管理のあり方を考える一助としたい。

研究方法：平成5年1月から平成7年12月までの3年間に聖隷浜松病院産婦人科で扱った5092件の分娩を対象として、基礎疾患を有する母体及びそれから出生した児の新生児・乳児期の状況を調査した。なお今回は産科合併症を有する母体から出生した児については検討から除外した。

研究成績：

1、母体の基礎疾患について。内分泌疾患28例、感染症24例、心疾患14例、神経・筋疾患13例、自己免疫疾患8例、アレルギー疾患8例、血液疾患4例、腎疾患4例、消化器疾患3例の計104例(2例の重複を含む)であり、総分娩数5092の2.1%を占めていた。

1) 内分泌疾患の内訳としては甲状腺疾患18例(機能亢進11例、機能低下7例)、糖尿病8例、高プロラクチン血症2例があった。2) 感染症ではB型肝炎キャリア9例、C型肝炎キャリア6例の持続感染以外に、水痘・帯状疱疹3例、細菌性赤痢1例、パルボウイルス感染1例、A型肝炎1例、EBウイルス感染1例、風疹1例の急性感染があった。3) 心疾患としては手術既往例が9例(心房中隔欠損2例、心室中隔欠損2例、ファロー4徴症、心内膜症欠損・動脈管開存、両大血管右室起始・心室中隔欠損・肺動脈狭窄、大動脈閉鎖不全、僧帽弁閉鎖不全が各々1例)、僧帽弁閉鎖不全2例、心筋症1例、本態性高血圧1例があった。4) 神経・筋疾患としてはてんかん10例、脳血管障害2例、筋緊張性ジストロフィ1例があった。5) 自己免疫疾患としては全身性エリテマトーデス3例、抗リン脂質抗体症候群4例、混合性結合組織病1例があった。6) アレルギー疾患としては気管支喘息7例、重症アトピー性皮膚炎1例があった。7) 血液疾患では遺伝性球状赤血球症2例、特発性血小板減少性紫斑病1例、血小板機能異常症1例があった。8) 腎疾患では慢性腎炎4例があった。9) 消化器疾患では炎症性腸疾患2例、神経性食欲不振症1例があった。(表1)

2、基礎疾患を有する母体の早期産率について。基礎疾患を有する母体104分娩のうち早期産となったのは9例で、在胎週数28から36週に出生した。早期産率は8.7%で、このうち母体適応による早産は4例であった。これ以外に在胎21週に房室ブロックによる胎児水腫に起因する胎内死亡が1例あった。本児の母体はシェーグレン症候群に罹患していた。

3、新生児について。基礎疾患を有する母体の104分娩中、新生児13名が入院となった。このうち母体疾患との関連で入院となったのは、筋緊張性ジストロフィ1名、遺伝性球状赤血球症1例、アラジール症候群1名、ファロー4徴症1名、細菌性赤痢1名、水痘1名、パルボウイルス感染症1名の計7名で、母体疾患と無関係の入院は2名、早期産又は低出生体重による入院は4名であった。パルボウイルス感

染症例は高度の貧血により胎児水腫となったが、胎内治療により回復し、早期産ではあったものの、新生児期には問題はなかった。新生児感染症の2名もそれぞれの疾患に対する治療により治癒した。遺伝性球状赤血球症とアラジール症候群の2名は黄疸に対する治療にて軽快した。ファロー4徴症および胎便吸引症候群の2名と、低出生体重児もそれぞれの疾患に対する治療にて軽快した。しかし、高度な先天異常であったポッター症候群と筋緊張性ジストロフィの2名は死亡した。入院しなかった児についても乳幼児期まで経過観察しているが発育・発達上問題はない。(表2)

考察：静岡県西部地域の周産期センターの役割を担っている当院産婦人科・小児科における、基礎疾患を有する母体から出生した児の胎児期、新生児期、乳幼児期の短期予後について報告した。当院における基礎疾患を有する母体の分娩は104例で総分娩数5092の2.1%であった。これは東京都母子保健サービスセンターが発表している1993年度の母体基礎疾患頻度の4.6%と比較すると低い。この報告の数値提供施設は全部で19施設あるが、このうち13施設が大学付属病院であるため、ハイリスク分娩を取り扱う頻度が高いのではないかと想像される。また『国民衛生の動向』によるわが国の早期産率は1992年では4.7%である。それに比較すると当院の基礎疾患を有する母体の早期産率8.7%は高値であるが、当院全体の早期産率11.5%と比較すると、高値とは言えない。当院で出生した児のうち入院を必要としたのは13名で、母体疾患と直接関連のある入院が7名と少なかった。これらの中に糖尿病や甲状腺疾患などによる入院児がなかったことは、周産期管理が適切になされていたことを示唆する。今回の集計には重症な基礎疾患を有する妊婦がいなかったことが幸いしているかもしれないが、産科・新生児科・内科などと適切な連携がなされれば、より安全な胎児・妊婦管理が可能となり得て、新生児の生活の質の向上に寄与できるものと思われる。

結論：

- 1、平成5年から7年までの3年間に当院産科で分娩した5092例の母体のうち、104例(2.1%)が基礎疾患を有する母体であった。
- 2、基礎疾患を有する母体から出生した児のうち13名が入院を要した。死亡は高度な先天異常の2例で、生存102例の予後は良好であった。
- 3、周産期管理を適切に行えば児の予後は良好となると思われた。

参考文献：

- 1) 東京都母子保健サービスセンター編：母子医療統計，1994年版：61,1995.
- 2) 厚生統計協会編：国民衛生の動向・厚生指針 臨時増刊，第41巻，第9号：46,1994.

表 1 母体基礎疾患分娩と早期産数・入院

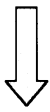
疾患	早期産数	入院数	分娩数
内分泌	1	2	2 8 *
感染症	3	4	2 4 **
心	3	4	1 4 **
神経・筋	1	1	1 3 *
自己免疫	1	0	8
アレルギー	0	0	8
血液	0	2	4
腎	0	0	4
消化器	0	0	3
計	9	13	104
院内総計	580	857	5092

* 内分泌疾患、神経・筋疾患重複1例

** 感染症、心疾患重複1例

表 2 胎児死亡例及び入院例の内訳

胎児死亡例（在胎21週）	1例
児：房室ブロックによる胎児水腫	
母：シェーグレン症候群	
入院例	13例
母体疾患に関連する例	7例
筋緊張性ジストロフィ	1例
遺伝性球状赤血球症	1例
アラジール症候群	1例
ファロー4徴症	1例
細菌性赤痢	1例
水痘	1例
バルボウイルス感染症	1例
母体疾患に関連しない例	2例
ポッター症候群	1例
胎便吸引症候群	1例
早期産児・低出生体重児	4例



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:平成5年から7年までの3年間に聖隷浜松病院産科で扱った5092例の分娩を対象として、産科合併症を除く基礎疾患を有する母体から出生した胎児・新生児の状況を検討した。基礎疾患合併母体の分娩は104例あり、総分娩数の2.1%を占めた。母体基礎疾患の内訳は内分泌28例、感染症24例、心14例、神経・筋13例、自己免疫8例、アレルギー8例、腎4例、血液4例、消化器3例であった。胎児死亡は在胎21週の胎児水腫1例のみであった。新生児入院は13例あり、母体基礎疾患に直接起因するものは7例で、無関係な疾患2例、母体適応による早産は4例だった。死亡はポッター症候群と筋緊張性ジストロフィの2例であった。生存102例の予後は母体と同様の疾患を有する児を除けば良好であった。適切な周産期管理を行えば、基礎疾患を有する母体より出生した児の予後は良好であると思われた。